

六 古内主膳未見を洞察す

扱話は伊達家の事に戻る。明暦三年大火の翌年七月廿三日、改元萬治元年となる。其七月に伊達少將忠宗朝臣が歿なくなられた。即ち義山公の事である。然るに此義山公の歿ぼつせられたときに追腹を切つたものがあつた。追腹を切ると云ふのは殉死じゆんしすることである。殉死と云ふ事はいつ頃から始まつたことやら知らねども、戦國以來盛んに行はれたので、正宗卿の父左京大夫輝宗朝臣の死んだときも、遠藤基信もとのおぶと云ふものが忌日に追腹を切り、近侍の内でも追腹を切つたものがあり、正宗卿の死んだときは十五人の追腹があり、正宗卿の墓の側に葬つてある。追腹と云ふことは善くないことに違ひない。しかし一通りならない君寵くんちゆうを蒙つたものが、たとへば君と生れし時を異ことにするとも、死ぬる時は一所しよにと思立つのも決して無理なことではない。徳川家康などは追腹と云ふことをきらひ、後になつて水戸家、會津家でも追腹を差止め、將軍家よりも色々察當さつとうがあつたけれども、元祿寶永げんろくほうえいの頃までも、矢張り武士氣質きしつで格別の君恩くんおんを蒙つたものは追腹を切らねば濟すまぬやうに感じたものである。たとへば柳澤美濃守吉保よしやすと云ふ人は五代將軍綱吉の取立てで微祿びろくから甲斐一國こくの領主になつたほどの恩を蒙つたものであつたが、寶永六年、綱吉逝去せいきよの砌、追腹を切らなかつたので、時の人が斯かういふ落首らくしゆをして嘲あざけつた。

追腹をきらうくと松だひら

身のいたむのを能くも知りてき

柳澤は徳川家より家の號がうを貰ひ松平美濃守といつて居つた故「きらうくと松平みの」云々と縁かへ語ことばで云つたのである。これは萬治二年からして四十餘年も後のことであるのに猶こんな風であ

る。まして萬治の頃殉死が行はれたのは尤ものことである。此義山公の冥土の供をして追腹を切つたのは、名高い古内主膳重廣と云ふものであつた。此時重廣は隱居して、其子息が家老の役を勤めて居た。重廣は元浪人であつたのを忠宗の取立てで大に用ゐられ、一萬石と云ふ高祿を與へられ久しく家老を勤め全權を揮つた人物であつたから、君恩の特に厚きに感じて殉死したのである。忠宗の柩の寺にゆくとき、古内の家からは殉死した主人の柩を出して直ぐ供をして伊達家の菩提所に行つたさうだ。然るに重廣が切腹する前に子息を呼んで、殿の御恩は海よりも深く山よりも高ければ、これより老の皺腹かき割きて三途の川なり、劔の山なり、極樂淨土なり、何處までも御供仕るべくと我は覺悟したり。されど御事に申残したきは、御家の爲に憂ふべきこと唯二あり。一には若殿の大酒したまふと云ふことなり。二には兵部少輔の才發にておはすことなり。是のみ氣掛なりと云つた。子息は之を聞き、若殿の大酒召すこと臣等も固より憂ひ奉る處なり。さりながら兵部少輔殿の才發にておはすを憂ふべきなりと仰せらるゝ、父上の御深意こそ計られね。御家の爲めに才發なる御末家のおはさんことは、願はしきことは候はずやと挨拶した。主膳は頭を振り、いや／＼才發なるにも色々あり。今に見よ我末期の一言に思合する時の來るべしと云つたとのことである。誠に古内の遺言は未然を洞察した名言であつて、若殿綱宗朝臣は大酒亂行の爲に押込の身となり、兵部少輔は才發なる爲めに伊達家に騒動を惹き起した。古老はいかなる處に目を附けて、かくは明かに後々の事までも見極めたらうと、後に至りて仙臺の人々古内の先見を驚いたと云ふことである。この話でも綱宗朝臣が先君少將在世の砌から大酒を好んで氣性の荒々しかつたことが分る。さて綱宗朝臣は家を繼がれて從四位下侍從兼陸奥守になられた。